・「子どもに希望を」『生活教育』第13巻第5号　1961年4月　pp. 78-79

子どもに「希望」を

山崎昌市

また、入学試験のシーズンがやってきた。入学試験問題をつくるとき、いつも考えることは、どうにかして受験生の可能的な能力を見出すことができないものか、ということである。もちろん数百枚もの答案を短期間に調べるのだから、このようなことは望みうべくもないのかも知れないが、やはりいつも考えさせられることである。というのは、ある調査によれば、ある科目についての成績とその科目についての興味、関心と相関は、必ずしも高くない。むしろ成績はいいが、興味は反対に非常に低いという事実が指摘されているからである。

入試のための勉強が、小学校からいや有名幼稚園へ入園するためにすでに始められ、大学を卒業し就職するまでついてまわる。戦前にあっては、高位顕職として大臣、大将を夢みることでこの受験勉強は動機づけられた。戦後は？・すでに、大臣、大将は子どもの夢を支えるほどの意味をほとんどもっていない。多くの親たちは、子どもに夢がない、将来の希望をもたせることができない、と訴える。子どもたちも、プロ野球の選手や大企業のサラリーマンを、豊かな消費生活を夢みる。そのためにも激烈な入試競争の戦列に加わらなければならない。学業成績が良くても、その科目に対する興味が湧いてこないのは当然である。ここにあるのは、立身出世主義でありぬけがけの功名である。このような社会に背を向けた個人主義が、クラスの仲間意識の形成をはばみ、民主的な教育組織をも切り崩していくであろうことはあまりにも明らかである。これは夢がないからだという。はたしてそうだろうか。日本の今日の状況では子どもに明かるい、大きな希望をもたせることができないのだろうか。

「現代の時代における人類社会の歴史的発展のおもな内容、おもな方向、おもな特徴を決定しているものは、社会主義世界体制、帝国主義的に反対してたたかっている勢力、社会の社会主義的改造のために闘かっている勢力である。帝国主義のどのようなあがきも歴史の前進運動をくいとめることはできない。社会主義の今後の決定的な勝利ための強固な前提がすでにできている。社会主義の完全な勝利は避けがたい。」これは昨年十二月発表された、八十一ヵ国共産党・労働者党代表者会議の声明の一節である。なんとすばらしい、希望に満ちた、力強い言葉であろうか。金星ロケットの打ち上げに代表される。社会主義世界体制の科学技術水準の高さ、それを支える、科学技術教育に集中的にあらわれている巾の広さ、層の厚さは、アメリカがソビエトのスプートニク打ち上げ成功に驚がくして、一九五八年九月に公布した国防教育法のような法的規制によっては、到底望みえないものなのではなかろうか。

ソ連の科学は、世界文明の発展に新しい

時代を開いた。ソ連は宇宙開発の端緒を開いて社会主義陣営が経済的技術的にいかに強力なものであるかを、明らかに示したソ連は、歴史ではじめて全人類に共産主義の道をきり開いている。ソ連は平和、民主的自由、民族独立、社会進歩のためにたたかう世界諸国民のもっとも輝かしい誇りであり、もっとも強力なとりでである。」このような力強く、輝かしい、国民的、国際的課題を達成する仕事の中に正当に位置づけられた教育は、教師も子どもも、「われわれの時代のおもな特徴は、社会主義世界体制が人類社会発展の決定的な要因になりつつある。」と胸をはって声たからに宣言することができるのだろう。社会心理学や教育心理学の定説をひくまでもなく、このような教育実践が、学習活動が、希望と誇りを教師にも子どもにもあたえずにはおかないだろう。

このような希望と誇りは、ただ社会主義世界体制の中での教育活動にかかわってあらわれるものなのだろうか。わたしは、今次教研集会の開会式当日の土原専禄氏の記念講演で引用された、アジア、アフリカ諸国の民族独立運動の指導者の言葉を思い出す。ガーナ首相エンクルーマは「われわれは奴隷として安住するよりも、危険をともなうとしても自治をえらぶ」と。またインドネシア大統領スカルーは「われわれは独立をかちとった。しかし、これの当然の代償として、われわれはこれらの人類の生存の問題にとりくまなければならない。これはどんな困難なことであってもやらねばならない。」と、さらにギニアのセク・トウーレ首相「アジア・アフリカ諸民族の独立の運動は、いまや世界的規模における平和確立の決定的な局面である。」と、これらの国々の政治状況はコンゴのルムンバ首相の虐殺という事実に集中的にあらわれているように、決して平坦なものではないはずである。にもかかわらず、世界教育会議やアジア・アフリカ諸国民連帯会議での報告にあるように、これらの諸国の教育は明かるい希望に満ちたものである。民族の完全独立をめざす教育が、そのまま全人類の平和運動への展望をもっているとすれば、利己主義や立身出世主義が学習の動機であったり教育組織を歪めるということは、よもやありえないだろう。

日本のティーン・エイジャーたちが、入試戦線から脱落を余儀なくされ、あるいは、それ加わることすら許されないとすれば、オートバイをフル・スピードで飛ばし、ロカビリーにわれを忘れ、またテロ少年の続発などに代表される青少年の頽廃現象を、一部の性格破綻者の行為だとして割り切るわけにはゆかない。子どもたちのこのような傾向を、大人たちの世界の無気力や堕落を放置したまま、修身科的道徳教育の強制で阻止しえないことは、もはやあまり明白なことであろう。大人にできないことを子どもがすすんでやらないからといって、「今の若いものは……」とどうして非難できようか。「働くものの解放のための教育文化の建設」をめざし「平和を守り、真実をつらぬく民主教育の確立」という教研活動の基本目標が、教育内容、方法の問題として具体化され、毎日の教育実践の中で意識的に生かされるならば、子どもたちはこのような教師の姿の中に、彼らにとっての新しい希望の緒を発見するのではなかろうか。

（国立音楽大学）